

26年度 World Rowing通常総会 (報告)



国際委員会
2026年10月16日

報告内容

0. 前提となる外部環境変化

1. 会議の概要

2. World Rowingが考える未来

3. World Rowingが推進する事業

4. 競技種目に関する改革/SECR

5. World Rowing Ranking構想

(ロランド会長)

(ビンセント専務理事)

(エバサント理事)

(ヘンク理事)

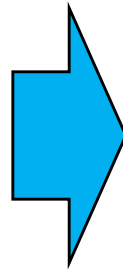
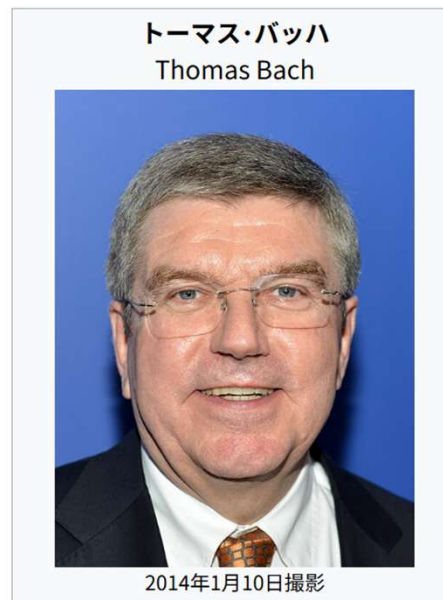
0. 前提となる外部環境変化

ポイント:

- (1) 25年6月にIOC会長がバッハ氏からコベントリー氏へ交代(*)した結果、IOCが従来進めてきた各種改革が大幅にスピードアップしながら、大きな方針変更を余儀なくされている。

(*)25年6月24日にコベントリー会長が就任。

- (2)これに伴い、World Rowingの改革案も25年度総会以降、大幅な変更、スピードアップが求められて居り、昨年総会よりも大きく変更している点あり。



メインメッセージ

Agenda 2020
Change, or be changed

Fit for the Future
Lead the Change, protect the magic

0. 前提となる外部環境変化

ポイント: 『Fit for the Future』 → 『未来に適應できる』

(1)五輪憲章 / Olympic Charterの改定

2026年版の主な変更点

項目	これまで	2026年版
① IOCの政治的中立性	IOCの独立性・スポーツの自律性を規定	「常に中立性を適用する」ことをIOCの役割として明記
② 外部からの圧力	政治的圧力等からの自律性を規定	政府・文化・社会・経済からの圧力を受けず中立性を維持すると明文化
③ オリンピック・プログラム	基本的に「競技（Sport）」単位で考える	「 競技－種別（Discipline）－種目（Event） 」の3層構造を明確化
④ 種別の選定	競技単位での採否が中心	2032年ブリスベンから、各「種別」を個別に評価
⑤ IOCのプログラム管理	競技そのものの採否が大きな単位	IOCが競技全体ではなく、個々の種別について柔軟に判断可能
⑥ 競技団体への影響	競技がオリンピック競技であることの安定性が比較的高い	同じIFの中でも、種別ごとにオリンピックでの位置づけが変わり得る

(2)オリンピック競技大会の改革

- ・eSportなど専門大会を新設する計画は取りやめたが一方、夏季・冬季の既存の大会体系の中で、各IFが管轄する身体運動型（フィジカル／コネクテッド）バーチャルスポーツをどう活かしていくか、という方向へと一本化された。
- ・種別毎に採用が判断され、夏冬入れ替わる種別も出る可能性有り。
- ・**「新しい種別」を入れやすくなる一方、既存種別は安泰ではない。**

*Change, or be ChangedとのIOCスローガンだったが、益々加速している雰囲気。

1. 会議の概要

会議名 : 2026 World Rowing Congress (2026 WR通常総会)

日時 : 2026/8/31

開催地 : オランダ・アムステルダムとonline

参加メンバー : 坂田会長、若井理事、安井理事

会議資料 : https://d2cx26qpfwuhvu.cloudfront.net/worldrowing/wp-content/uploads/2026/07/19174137/2026-WR-Ordinary-Congress-Agenda-Papers-ENG_corr.pdf

(主な報告事項を抜粋し、和訳したサマリーを後頁にて報告。

会議の全体像は以下URLから御参照下さい)

会議動画 : <https://www.youtube.com/watch?v=hfa0SVMhHNU&t=4873s>

2. World Rowingが考える未来 (ロランド会長)

メインメッセージ

“A Broader vision for World Rowing”

(ローイングの伝統と価値を守りながら、競技の魅力と世界的な存在意義を高める為に、
World Rowing全体で変革していく)

主なトピック

1. 変化への適応は不可避

世界とスポーツを取り巻く環境が急速に変化する中、WRも変わらなければならない。

2. ローイングの本質は守る

変化やイノベーションは、ローイング固有の価値や基本原則を捨てることではない。

3. ガバナンスとアスリート参加を強化する

良いガバナンスは制度だけでなく「人」によって支えられ、アスリートがローイングの将来形成に積極的に関与することが重要。

4. オリンピックでの存在意義を確保する

歴史だけでは将来は保証されない。特に「世界的な訴求力」「魅力」を高め、オリンピックを含む国際スポーツ界で選ばれ続ける競技になる必要がある。

5. ローイング全体のエコシステムを変える

アスリート、大会、メディア、放送、ファン、組織委員会などを含めて魅力を高める。
短距離化など単純な変化ではなく、テクノロジーや新しい形式も活用しながら、
ローイングの本質を守って発展させる。

2. World Rowingが考える未来（ロランド会長）

1. 変化への適応は不可避 / 2. ローイングの本質は守る

地政学、経済、社会、環境、技術など、世界を取り巻く環境が急速に変化する中で、スポーツ、そしてローイングもその影響から逃れることはできないと指摘した。競技を取り巻く環境がますます競争的になる中、World Rowingとローイングが将来にわたって存在意義を持ち続けるためには、変化への適応が不可欠であると強調した。一方で、適応はローイングの中核的な価値や基本原則を犠牲にすることではなく、「ローイングをローイングたらしめているもの」を守りながら、より良い方向へ変化していくことが重要だと述べた。政治面では、世界的な紛争や分断が続く中、スポーツは国境や文化などの違いを越えて人々をつなぐ重要な役割を担っていると説明。その為、スポーツは政治的に中立であり、政治的な目的のために利用されることなく、自主性、独立性、インテグリティを維持する必要があるとした。また、競技場や表彰式を政治的デモンストレーションから守るというWorld Rowingの原則を改めて確認した。ロシア・ベラルーシ選手については、2026年シーズンについて個人中立選手としての参加方針を適用し、2027年については今後検討すると説明した。

3. ガバナンスとアスリート参加を強化する

World RowingがASOFのガバナンス・レビューで最上位カテゴリーに位置づけられたことを評価しつつ、ガバナンスに「ゴールライン」はなく、継続的な改善が必要だと強調した。また、良いガバナンスを支えるのは制度や規則だけではなく、それを担う「人」の誠実さ、責任感、献身であると述べた。特にアスリートについては、単なる一つのステークホルダーではなく、World Rowingが存在する理由そのものであり、意思決定に積極的に参加し、ローイングの未来をともに作る存在であるべきと強調。

4. オリンピックでの存在意義を確保する

「ローイングの偉大な歴史は、将来を保証するものではない」という従来からのメッセージを改めて示した。オリンピック・パラリンピックへの参加は、政府や各国オリンピック委員会からの認知、支援、資源、そして世界的な競技普及に大きく影響するため、ローイングにとって極めて重要であると説明した。
新しいオリンピック・プログラムでは、競技単位ではなく「種目(discipline)」単位で、世界的な訴求力、コスト、複雑性などを基準に評価されることから、ローイングには将来的なリスクがあるとの認識を示した。特に「世界的な訴求力」を高めることが重要だとした。

2. World Rowingが考える未来（ロランド会長）

5. ローイング全体のエコシステムを変える

そのための中心的な取り組みとして、SECRプロジェクトを挙げた。ローイングが若い世代、メディア、放送局、IOC、政府・自治体、大会組織委員会などから、継続して「選ばれる」競技であるためには、競技そのものと大会の「魅力」を高める必要があると説明した。

アスリートの大会参加、大会数や露出、メディア・放送、ファン、大会組織委員会などを含め、ローイングのエコシステム全体で取り組む必要があるとした。

特に、国際大会へのトップアスリートの参加が少なくなれば、メディアやファンの関心、大会の事業性、資源確保にも悪影響が生じ、

「参加減少 → 魅力低下 → 資源確保の困難化」という悪循環につながると指摘した。

そのため、関係者全体が努力し、必要な妥協や適応を行うことがSECRの核心であると述べた。世界選手権のプログラムや新しいプログレッション・システムなど、

すでに変化も始まっていると説明した。一方、競技を魅力的にするために、単純にレース距離を短縮すればよいという考えには明確に否定的な姿勢を示した。

Shanghai Sprintsのようなスプリント形式にはプロモーション上の価値があると認めながらも、ローイングの中心に据えるべきではないとした。テクノロジーやソーシャルメディアなどを積極的に活用しながらも、流行を追うだけでローイング固有の価値や特徴を失ってはならないと強調した。

2. World Rowingが考える未来 (ロランド会長)

五輪憲章から、オリンピック競技大会で開催されるスポーツのIF名が削除された。

Olympic Movement: a New Era



Amendments to Rule 45 Programme of the Olympic Games

- 1.3.1 The sports, governed by the following IFs, which are currently included in the programme, namely:
 - World Aquatics (AQUA);
 - World Athletics;
 - World Rowing (FISA);
 - Badminton World Federation (BWF);
 - International Basketball Federation (FIBA);
 - International Canoe Federation (ICF);
 - Union Cycliste Internationale (UCI);
 - International Equestrian Federation (FEI);
 - International Fencing Federation (FIE);
 - Fédération Internationale de Football Association (FIFA);
 - International Golf Federation (IGF);
 - International Gymnastics Federation (FIG);
 - International Weightlifting Federation (IWF);
 - International Handball Federation (IHF);
 - International Hockey Federation (FIH);
 - International Judo Federation (IJF);
 - United World Wrestling (UWW);
 - International Modern Pentathlon Union (UIPM);
 - World Rugby;
 - World Taekwondo (WT);
 - International Tennis Federation (ITF);
 - International Table Tennis Federation (ITTF);
 - International Shooting Sport Federation (ISSF);
 - World Archery Federation (WA);
 - World Triathlon (TRI);
 - World Sailing (WS);
 - International Volleyball Federation (FIVB);

2. World Rowingが考える未来 (ロランド会長)

IF名が削除されたが、種別名が認識された。

Olympic Movement: a New Era

Disciplines.

An Olympic discipline is one or more events within a sport that require either a dedicated field of play or a significant modification of a shared field of play with another Olympic discipline, generally involving a separate group of athletes.

SUMMER DISCIPLINES

For illustrative purposes only. The Paris 2024 disciplines are used as a reference, excluding those proposed by the OCOG.

SINGLE DISCIPLINE SPORTS

ARCHERY	BADMINTON	BOXING	FENCING	FOOTBALL	GOLF
Archery	Badminton	Boxing	Fencing	Football	Golf
HANDBALL	HOCKEY	JUDO	MODERN PEN	ROWING	RUGBY
Handball	Hockey	Judo	Modern Pen	Rowing	Rugby Sevens
SAILING	TABLE TENNIS	TAEKWONDO	TENNIS	TRIATHLON	WEIGHTLIFTING
Sailing	Table Tennis	Taekwondo	Tennis	Triathlon	Weightlifting

MULTI DISCIPLINE SPORTS

AQUATICS	ATHLETICS	BASKETBALL	CANOE	CYCLING	EQUESTRIAN
Swimming	Track & Field	Basketball	Sprint	BMX Freestyle	Eventing
Open Water Swimming	Marathon	Boxing	Slalom	BMX Racing	Dressage
Diving	Race Walk	SHOOTING	VOLLEYBALL	Mountain Bike	Jumping
Water Polo	GYMNASTICS	Target Shooting	Beach Volleyball	Road	WRESTLING
Artistic Swimming	Artistic	Shotgun	Volleyball	Track	Graeco-Roman
	Rhythmic				Freestyle
	Trampoline				

SPORT	28 Sports
Discipline	47 disciplines (as per the new definition)

2. World Rowingが考える未来 (ロランド会長)

Classic Rowing種別はIncumbent Discipline扱い (既存の種別)

Beach Sprint Rowing種別はCandidate Discipline扱い (新候補の種別)

→LA28でBeach Sprintは実施されるが、Brisbane32で採用が決まって居る訳ではない。

Olympic Movement: a New Era

EVALUATION FRAMEWORK | PROCESS



Flag Evaluation

Assessment on Integrity, Fairness, Sustainability, and Safety criteria

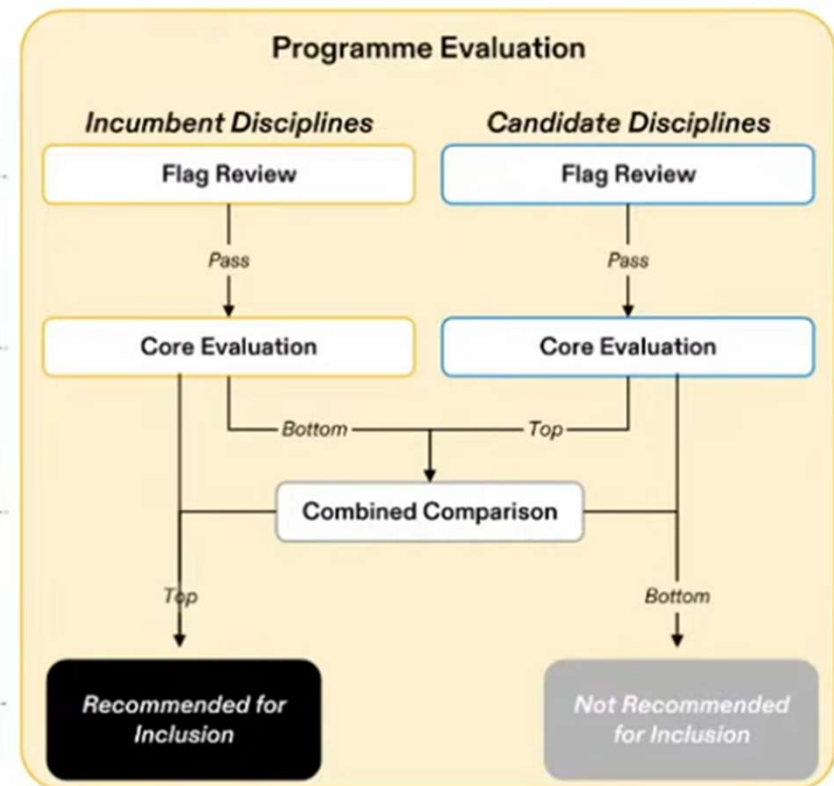
Core Evaluation

Assessment on Global Appeal, Cost and Complexity and Athlete Representation criteria

Combined Comparison

High-performing candidate disciplines compared to low-performing incumbent disciplines

Programme Recommendation



3. World Rowingが推進する事業 (ビンセント専務理事)

2029年以降を見据えたWorld Rowingの重点プロジェクト

① SECR / Strategic Events & Calendar Review	② 大会開催プロセス / Attribution Process Review
2029年以降の大会カレンダー・競技体系を再構築	開催地決定プロセスを抜本的に見直し
・ 新たな競技・大会の創設	・ TSC (The Sports Consultancy) を起用
・ 混合艇、複数種目出場などの導入	・ 開催都市・加盟団体の負担を軽減
・ 競技の見せ方・プレゼンテーションを改革	・ 2027年から新たな開催地決定プロセスへ
③ Beach Sprint 360 / BSの世界的・持続的发展	④ Shanghai Sprints / 25年世界選手権のレガシー
・ 6つの戦略的柱	・ Shanghai House of Rowing
・ 2027-28 Beach Sprint Seriesを新設	・ World Rowing Shanghai Sprintsを創設
・ オリンピックでの発展も視野	・ 新たな競技・大会モデルを展開

▶ 目指すもの

Transforming the reach, the image and the revenues of our sport

新たな接地面、イメージ、収入源を得て、ローイングの新たな側面を創出する

3. World Rowingが推進する事業 (ビンセント専務理事)

現在進めて4大事業に関して、以下の通り、説明した。

1. Strategic Events and Calendar Review (SECR)

最重要で、場合によってはローイングの将来を左右する「critical and possibly existential」なプロジェクトであると強調。本取組は、2029年以降の大会カレンダーと競技体系を形作るものであり、2025年の段階で既に、競技プログラムと進行システムの見直し、メダルセレモニー等競技の見せ方の変更、複数種目への出場(doubling up)の促進、MIX種目の導入、新たなクラシックローイング大会であるShanghai Sprintsの創設など、具体的な成果が生まれている。

午後のセッションでは、このSECRについて約2時間をかけて集中的に議論し、加盟団体にも積極的な参加を求めるとした。

2. 大会開催地の決定・選定プロセスの見直し

大会・カレンダーの見直しを踏まえ、開催地決定に至るプロセス全体を再検討している。26年夏に、入札戦略および開催地調達の専門機関であるThe Sports Consultancy(TSC)を起用し、戦略的レビューから、2027年以降の大会開催地決定プロセスまで支援を受けることとなった。

WR主催大会開催には、複雑な交渉、資金調達、商業面のノウハウなどが必要で、非常に困難な取組であると指摘。その為、WRとして加盟団体への支援を強化し、大会開催に伴う負担を軽減することを目指していると述べた。また、27年1月には、29～32年の世界選手権およびW杯等を対象とした新たな開催地決定プロセスを開始する予定、まずクラシックローイングの世界選手権およびW杯を優先すると説明した。

3. World Rowingが推進する事業 (ビンセント専務理事)

3. Coastal Rowing

特にBeach Sprint Rowingにつき、Beach Sprint 360戦略とWorld Rowing Beach Sprint Seriesを紹介した。26年初頭に開催したWR Joint Commission Meeting及びCouncilによりBeach Sprint 360戦略が承認され、Beach Sprintを世界的かつ持続可能に発展させる為の6つの戦略的柱が設定された。その中には、オリンピック競技としての発展も含まれている。

具体的な取組みの一つに、27～28年に新たな「World Rowing Beach Sprint Series」を創設することを発表。Congressでは、その第1回大会および28年大会の開催地を発表するとし、これをLos Angelesに向けた発展の道筋の一部として位置付けた。

4. Shanghaiでの取組み

Shanghai House of Rowing及びWorld Rowing Shanghai Sprints大会について説明した。25年の上海世界選手権で示されたレガシーの一つとして、新たにShanghai Sprintsを創設し、数週間後に第1回大会を開催する予定であるとした。第1回大会については、25年世界選手権の結果に基づいて出場資格を得たチーム・選手が既に発表済。また、27年大会については、26年Amsterdam世界選手権の結果を踏まえて招待されるチーム・選手をCongressで発表すると説明した。

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

総括:

「Classic Rowingの本質を守りながら、大会・カレンダー・競技Pathwayを再設計し、ローイングをより魅力的で、世界的で、持続可能なスポーツに変えていく」

特に重要なのは、次の4つのキーワード

視点	内容
Global Appeal	世界のより多くの人に魅力を伝える
Sporting Continuity	大会を年間のストーリーとしてつなげる
Sustainability	選手・NF・開催地・運営者が継続できる仕組み
Commercial Value	メディア・放送・スポンサーにとって価値ある大会にする

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

1 SECRの目的 — Classic Rowingの将来を再設計する

Strategic Event and Calendar Review (SECR)は2023年に開始され、Classic Rowingを持続可能で、よりつながりのある競技として将来につなげることを目的としている。

今回の検討対象は、現時点では他の種目ではなく、Classic Rowingに限定されている。

検討するのは単なる大会日程の変更ではなく、
大会プログラム
年間カレンダー
競技者が大会へ進んでいくCompetition Pathway
World Cup等の大会体系
国際大会との関係
などを一体として見直すことである。

その基本的な考え方は、**「変化すること自体が目的ではなく、Classic Rowingを将来にわたって強く、魅力的でRelevantな競技として維持すること」**にある。

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

2. なぜ今、変革が必要なのか

「時代に即し、魅力的で、人々を惹きつけ、持続可能で、
オリンピック競技であり続けるローイング」を目指す必要がある。

国際スポーツを取り巻く環境は急速に変化しており、政治・地政学、経済、テクノロジー、
メディア、社会環境などの変化によって、以下の様な問題が生じている。

- 国際移動が難しくなる可能性
- 大会開催に使える資金の制約
- 若い世代のメディア接触方法の変化
- スポーツコンテンツの競争激化
- アスリート、会場、組織委員会などのリソース確保

つまり、ローイングはテレビの放送枠だけでなく、選手の時間、開催地、スポンサー、資金、
観客の関心などをめぐって、他のスポーツと競争している。

そのため、World Rowingの大会を、
Relevant: 時代に即した、存在意義のある
Attractive: 魅力的な
Engaging: 人々を惹きつけ、参加・関与を促す
Sustainable: 持続可能な
Olympic: オリンピック競技としての地位を維持できる
なものにしていく必要がある

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

3.「Attractiveness(魅力)」が重要

ローイングの「世界的な訴求力(Global Appeal)」と魅力を高めることが重要。

これはトップアスリートだけの問題ではなく、

Grassroots → Athlete → National Federation → Events → Fans → Media

→ Broadcasters → Sponsors

草の根(普及・参加者) → アスリート → 各国国内競技連盟 → 大会 → ファン → メディア

→ 放送事業者 → スポンサー

というローイング全体のエコシステムに関わります。

若い人に「やってみたい」と思ってもらえる

ファンが大会を追いかけたくなる

メディア・放送局が継続的に取り上げたいと思う

スポンサーが投資する価値を感じる

開催都市・組織委員会が大会を開催したいと思う

競技になることが重要だとした。

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

4. オリンピックとの関係

Classic Rowingにとって、オリンピック種目であり続けることは極めて重要である。

一方、IOCの「Fit for the Future」における評価では、

Global Appeal: 65%

Cost and Operational Complexity: 20%

Athlete Representation: 15%

という要素が重視されると説明。

その為、単に「オリンピック種目だから大丈夫」と考えるのではなく、Rowing自身が世界的な魅力を高め、アスリートが世界の舞台へ到達できるPathwayを整備する必要があるとした。

5.現在のRowingが抱える問題

現在の大会体系について、大きく3つの根本的な課題を挙げた。

- ① Unpredictable Inputs＝参加者・参加チーム数などが予測しにくい
- ② Weak Sporting Continuity＝大会間の繋がりが弱く、年間を通したストーリーが作りにくい
- ③ Weak Commercial Model＝商業的な価値を十分に生み出しにくい

特にWorld Cupについては、各大会にトップ選手が必ず参加する訳ではない為、放送局にとって大会シリーズ全体を継続的に追うことが難しい。

また、各国NFにとっても、World Cup参加費用が大きな負担となっている。

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

6. World Cupを「つながったシリーズ」に

World Cupについては、単独の大会を並べるのではなく、World Championshipsやオリンピック競技大会へ向かう一連の競技Pathwayの一部として再構築する方向が示された。

International Regattas→Continental Championships→World Cup / World Cup Series
→World Rowing Championships→オリンピック競技大会

というように、各大会が意味を持ってつながる構造を目指す。

又、World Cupについては、29～32年のサイクルを念頭に、開催場所、開催間隔、大会規模、期間、商業性、放送、参加費用などを総合的に検討している。

7.カレンダーは「一つの変更」では解決できない

カレンダーについては、例えばW杯を短期間に集中させる案など複数の選択肢を検討中。
しかし、

選手の負担／欧州の夏季の猛暑／U19・U23世界選手権との関係／大学等のスケジュール
World Rowingのスタッフ／大会運営会社／ビザの問題／南半球と北半球の事情
他競技・マルチスポーツ大会との競合

などがあり、単純に「大会を増やす」「間隔を短くする」だけでは解決しない。

SECRが時間を要している理由は、ローイングの大会システムそのものが非常に複雑なエコシステムだからと説明している。

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

8. World Rowing Rankingの位置づけ

SECRの重要な要素として、World Rowing Rankingも挙げられた。但し、RankingをWorld Championshipsへの「出場資格」にすることが目的ではなく、RankingをWorld Cupへの参加を促すインセンティブとして活用するという考え方が示された。

つまり、強制的にWorld Cupへ参加させる仕組みではなく、ランキングを通じて選手・チームが年間を通して大会に参加する動機を作ることを目指している。

(構想は後述のHenk理事発表内容参照)

9.World Championshipsの参加規模について

運営上の理由から参加数を制限する可能性も議論されている。

例えば男子・女子のSingle Scullsについて最大36艇という案も議論に出たが、Eva理事は明確に、「まだ決定されていない」と説明。

むしろ、World Championshipsには多くの国が参加すること自体に大きな価値があり、World Cup参加をWorld Championshipsへの必須条件にすることで参加国が減ることについても議論された。

4.Strategic Event & Calendar Review / SECR改革 (エバサント理事)

10. Continental Championships・Regional Eventsの役割

今後、各地域・大陸の大会を、World ChampionshipsやWorld Cupとは切り離された大会として考えるのではなく、世界大会へ向かうPathwayの一部と位置付ける可能性も示された。例えば、

Continental Championships → World Cup → World Championships
という流れを作ることで、

地域での競技機会を増やす、世界大会への準備機会を作る、
各地域から世界大会へ選手を送り出す、ローイングの市場を各地域で広げる
といった効果が期待される。

但し、これらは検討・議論の段階であり、決定事項というわけではない。

11. 変えるものと、守るもの

今回のSECRで重要なのは、全てを変えるわけではないという点である。

Classic Rowingのアイデンティティ、特に競技の核となる部分は守るという考え方が示された。その代表例として、

2,000m、6レーン、Side-by-Side Racing
を基本として維持する考え方が示されている。

つまり、

「ローイングらしさ」を守りながら、競技を取り巻くシステムを変える
というのがSECRの基本姿勢である。

5.World Rowing Ranking構想 (ヘンク理事)

総括:

「World Rankingを使って、オリンピック競技大会を頂点とするローイングの大会を年間を通じて一つにつなぎ、選手の出場機会を増やし、ローイングを“観客が見るスポーツ”へ変えていく」

特に重要なのは、次の5つのキーワード

キーワード	意味
World Ranking	新しい競技価値の指標
Glue	全大会をつなぐ仕組み
Participation	年間を通じた大会参加を促す
Spectator Sport	観客・メディアに見せるスポーツへ
Commercial Value	選手・大会・World Rowingの商業価値向上

5. World Rowing Ranking構想 (ヘンク理事)

1. World Rankingの最大の目的

現在のローイングでは、選手・各国連盟にとって、オリンピック競技大会が最大の目標・価値となっており、4年間の活動の中でオリンピック出場資格とオリンピックでの結果が、資金確保にも大きく影響しています。

ヘンク理事は、この「オリンピックの価値」を年間を通じた他の大会にも広げたいとしています。

そのためにWorld Rankingを活用し、「オリンピックだけを目指すのではなく、年間を通じてより多くの大会に出場する」という選手・連盟の行動変容を促すことが、ランキング導入の大きな目的との事。

2. Rankingは「大会をつなぐ接着剤」

Rankingを単なる順位表ではなく、大会全体をつなぐ“Glue(接着剤)”として位置づける考え方です。イメージとしては、

International Regattas

→ Continental Championships

→ World Cups

→ World Championships

→ オリンピック競技大会

という一連の競技システムを構築することです。

特に、現在十分に活用されていないContinental ChampionshipsやInternational Regattasの価値を高めることを重視する構想。

5. World Rowing Ranking構想 (ヘンク理事)

3. 地域大会・International Regattasを復活させる

過去30年間でInternational Regattasの価値が低下してしまったとの認識を示しています。

そこで、

地域大会にランキングポイントを与える

トップ選手が参加する仕組みを作る

大会主催者にとっても価値のある大会にする

将来的にはWorld Cupレベルへ発展できる大会を作る

という方向を示しています。

つまり、World Rowing主催の大会だけを発展させるのではなく、既存の地域・国際レガッタをWorld Rowingの競技エコシステムに組み込むという考え方です。

4. 「Training Sport」から「Spectator Sport」へ

「TrainingのためのSport」

→「Performanceを見せるSport」

→「Spectatorが見るSport」

へ転換する必要があるとしています。

即ち、ローイングでは、トップ選手を見る機会が年間数回に限られています。

そこで大会数・出場機会を増やし、選手の活躍を年間を通じて見せることで、

選手 → 大会 → メディア → ファン → スポンサーという価値の循環/エコシステムを作ろうとしています。

5. World Rowing Ranking 構想 (ヘンク理事)

5. Rankingには「ガバナンス」の役割も持たせる

Rankingを利用して、大会ごとの価値を明確にすることも構想されています。

例えば、

オリンピック競技大会：最高レベル

World Championships

World Cups

Continental Championships

International Regattas

というように、各大会に異なる価値を設定する。

さらに、単なるポイントだけではなく、**Seeding (組み合わせ・シード)**にも活用することが検討されています。

6. Rankingは「参加」ではなく「Performance」を評価

重要なのは、単に大会に出ればポイントがもらえる仕組みにはしないことを想定。

即ち、「ParticipationではなくPerformanceを評価する」ことを基本原則としています。

一方で、選手やコーチがランキング制度の「抜け道」を探す可能性も認識しており、制度設計によって意図しない行動が生まれないようにする必要があるとしています。

5. World Rowing Ranking 構想 (ヘンク理事)

7. ポイント制度はまだ「検討中」

ランキング制度の詳細は未確定。但し、検討されている主要要素は、
大会ごとのポイント

Boat Class Factor

ポイントの減衰 (Depreciation)

複数種目出場 (Doubling Up)

International Regattas の扱い

Seeding への利用

Qualification への利用 等。

特に、過去の成績をどれだけ残すかは重要な論点です。

例えばオリンピックの結果を翌年にも100%残すのか、World Championshipsは50%にする等、
現在はシミュレーションを行っている段階です。

8. 小規模国・若手選手もシステムに入れる

本制度では、トップ選手だけではなく、

「World Championshipsに出場できない選手をどう取り込むか」も重要なテーマとしている由。

International Regattasを入口にして、

若手・ジュニア・U23

→ International Regattas

→ World Cups

→ World Championships

 という成長ルートを作ることが考えられています。また、将来的には国内大会にも
ランキングを導入する可能性について言及しています。

5. World Rowing Ranking 構想 (ヘンク理事)

9. Qualificationに使うか、Seedingに使うか

この2点は、かなり議論になっている由。

World Rankingを、

① World ChampionshipsへのQualificationに使うのか

② Seedingに使うのか

という課題です。

現時点ではまずSeedingに使うことを検討しており、Qualificationへの利用については慎重な議論が必要だとしています。

一方で、別の場面では、選手の大会参加を促すためにはQualificationという「ルール」が強力なインセンティブになるとも説明しています。つまり、ランキングをQualificationに使うことは、まだ決定事項ではないというのが重要です。

10. Commercial / Media Valueを高める

本構想は、マーケティング・メディア・商業価値を高めるツールとしても考えられている模様。

例えば、「現在、世界ランキング1位は誰か？」

というストーリーを年間を通じて発信する。更に、

- ・年間ランキング
- ・ランキング表彰
- ・賞金
- ・特別イベント

等のメディアコンテンツに発展させる可能性も議論中。単なる「競技ランキング」ではなく、ランキングそのものをコンテンツにするという発想。

5.World Rowing Ranking構想 (ヘンク理事)

11. 最終的な構想

現在

オリンピック競技大会

→World Championships / World Cups

→その他の大会という「上位大会中心」の構造。

目指す姿

International Regattas

→ Continental Championships

→ World Cups

→ World Championships

→オリンピック競技大会

これらをWorld Rankingで一本につなぐ。その結果、

選手が大会に出る

↓ランキングが上がる

↓大会の価値が上がる

↓メディア・スポンサーの関心が高まる

↓大会の収益が増える

↓選手・連盟・大会・World Rowingに価値が還元されるという循環/エコシステム
を作ることが最終的な狙いだと考えられます。

EOF